

赤い船とつばめ

小川未明

青空文庫

ある日の晩方、赤い船が、浜辺につきましました。その船は、南の国からきたので、つばめを迎えに、王さまが、よこされたものです。

長い間、北の青い海の上を飛んだり、電信柱の上にとまって、さえずつていましたつばめたちは、秋風がそよそよと吹いて、木の葉が色づくころになると、もはや、南の方のお家へ帰らなければなりませんでした。寒さに弱い、この小鳥は、あたたかなところに育つように生まれついたからです。

王さまは、もうつばめらの帰る時分だと思うと、赤い船を迎えよこされました。つばめたちも、船に乗りおくれはならぬと

おも思つて、その時分には、海岸の近くにきて、気をつけていました。そして、波間に、赤い船が見えると、

「キイ、キイ……。」といつて、喜んで鳴いたのです。

早く見つけたつばめは、それをまだ知らない友だちに告げるために、空高く舞い上がって、紺色の美しい翼をひるがえしながら、

「赤い船がきましたよ。さあ、もう私たちは、立つときです。どうか、遠方にいるお友だちに知らせてください。」といいました。

なかには遠いところにおいて、まだ知らずにいるものもありました。そういうつばめは、村に他のいいお友だちができて、「まあ、

まあ、そんなに急いで、お帰りなさることはない。」といわれて、引きとめられているつばめたちであつたのでした。

赤い船は、浜辺に四日、五日、とまっています。そして、四方から、毎日のように集まってくるつばめを待っています。もう、たくさんつばめが船に乗って、最後には、ほぼしらの上まで止まつて、まつたく、はいる席がなくなつた時分、静かに海岸をはなれたのです。

たいていは、月のいい晩を見はからつて、出発しました。なぜなら、長い海の上をゆくには、景色が見えなければ、退屈であるし、また途中から、船をたよつて、飛んできて加わるものがないとはかぎりなかつたからです。

あるとき、一羽のつばめは、船に乗ろうと思つて、遠いところから、急いで飛んできましたが、すでに船の立つてしまつた後でした。

そのつばめは、ひじょうにがっかりしました。しかたなく、木の葉を船として、これに乗つてゆこうと決心しました。それより海のかなたへ、渡る途はなかつたのです。

昼間は、木の葉をくわえて飛んで、夜になると葉を船にして、その上で休みました。そのつばめは、こうして、旅をしているうちに、一夜、ひじょうな暴風に出あいました。驚いて、木の葉をしつかりとくわえて暗い空に舞い上がり、死にもの狂いで夜のあいだぼうふうと戦いながらかけりました。

夜が明けると、はるか目の下の波間に、赤い船が、暴風のた
 めに、くつがえつてゐるのを見ました。それは、王さまのお迎え
 に出された赤い船です。つばめは、急いで帰つて、このことを王
 さまに申し上げました。——王さまは、ここにはじめて、自らの
 ちからをたよることのいちばん安、心なのを悟られ、あくる年から、
 赤い船を出すことを見合わせられたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日

1977（昭和52）年3月10日第1刷

※表題は底本では、「赤《あか》い船《ふね》とつばめ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：本読み小僧

2012年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い船とつばめ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>